

霏霏として雪の降る

中島八十一

甲府郊外湯村。夕刻より降り始めた雪の涔涔しんしんと降り、翌朝には庭土を靴の沈むほどに埋めて、土地柄には合はぬ蘇鐵の葉蔽ひあまたの灌木いづれも緘々黙々と鎮まりたり。他には行幸啓の砌に新たに造りし湯殿の菊水の形に設へる湯口より得々と無色無臭の湯の出る様ばかり遙けき彼方の記憶に残れり。新幹線未だ運行始めざる年代なれば身延線を富士川沿ひに下りて富士に向かひ愛知に歸りたり。甲府或は富士のいづれに向ふが上りなるや六十餘年後の今日に至りてなほ知らず。曾遊の地を再び訪れむとせぬは、その行ひのはつかなる思ひ出を確かむるわざにはならずかへりて失ふまじき思ひ出に水を注すことに他ならねばなり。

羽田より飛び立ちて秋田空港まで五十分、著陸し駐機場に至るまで窗より見る景色の雪また雪なればよくここに降りたりと機長の伎倆に格別なる心地覺えけり。いづくも似たる設計の地方空港を抜け、迎への車に乗り込みやうやく雪の降り止みたる曇り空の下、空港の在る臺地より下り坂に差し掛かる。フロントガラスいっぱいに映る漫々たる雪の原、さなる雪景色よりこの地の豊かなる自然及び産物を思ひ浮かぶること余には得ず。江戸時代雪無き三河より來りてこの地に住み著きたる菅江眞澄の雪にこそ憧れを持ちたため。翻りて大學卒業の折、早稻田を卒業して郷里の企業に就職定めし高校の同級生、東京の思ひ出の一番に擧げたるは雪の積れることなりと語れり。

ブリュッセル市内、國土地理院協の大通りを徒歩にて抜けアパルトマンに戻るは當時の余の日常なり。ある晩秋の夜、果たしてかかる留學何か成果の上がるものなりやと自問すれば、十か月以前初めて教室を訪れたる余を迎へたる教授祕書マダム・ルメールの成功を祈るわ J'espère votre réussite. (ジエスパール ヴォートル レュシットウ) と靜かに語りかくる映畫的一幕の如き場面脳裏をよぎる。その時、並木なす高きマロニエのなほ上、蕩々たる暗闇より雪片の翩々へんへんと降り始めたり。さなる時、並木の高き梢にて鳥の啼きてありや余は知らず。アダモはブリュッセルの生まれ育ちなり。オードリー・ヘップバーンもまたブリュッセルの生まれなり。ヘップバーンもローマ字のヘボンも同じスペルにて記す。カタカナにて書き分くるは日本人の所業にこそあらめ。明日になれば教室の看護婦に訊かむ、いかに發音すべしやと。このをんな三か國語、四か國語と自在に使ひ分くるに拘はらず年柄年中勤め先探すに汲々とし、明日も異なる言語にて書かれたる新聞の求人欄を見つめることなるべし。

東京。ボスは自宅を私設の研究所に設へて學者集め議論の場にし居り。さなる日々の春の一日、午後に臺灣坊主の通過有り。外見るに雪ならむかと思ふ間にみるみるその勢ひ増し、霏々と降り続け、屋敷圍む石塀に積る厚さの増し行く様目に見ゆるほどなり。淡蒼球内節より視床^{VIII}核に至る入力信號の定量如何ならむと論じたるところにスタッフ來りてラジオの傳ふるに交通機關の隨所にて止まりたらむ、直ちに歸宅考ふべしと。一同狼狽^{うろた}ふること甚だし。

（令和八年四月十七日受附）